

奨励的研究助成予算「プロジェクト研究推進経費・進捗状況報告書」

プロジェクト 研究代表者	所属学系 人間・心理 氏 名 飛 田 操
研 究 課 題	教育発達心理学的視点からみたコミュニケーション機構の解明
成 果 の 概 要	<p>これまで以下の検討がなされ、学会発表や論文がなされた。</p> <p>(1)精神障害者・発達障害児におけるコミュニケーション能力についての検討 統合失調症患者の認知機能・コミュニケーション能力評価方法について、関連研究者・医師と意見・情報交換を重ねた。また、自閉性スペクトラム児童コミュニケーション能力については、日本心理学会で発表した。 これらの知見は、以下にまとめられる： ①認知機能を測定する言語課題は、使用言語の影響が認められる。従って、日本語話者統合失調症患者の言語に関わる認知機能課題の作成は、日本語の特性を十分に留意する必要がある。 ②語流暢性課題の分析から、自閉性スペクトラム障害児の長期意味記憶構造、及び一般化に関わる言語表現の運用には、健常児と異なる特異性が認められた。</p> <p>(2)乳児期のコミュニケーションの検討 乳児の全身の動きは、乳児自身の意図の明確化とともに、自発的な運動から、随意的な運動へと変化する。特にコミュニケーション場面では、乳児はかなり早期から、非コミュニケーション場面とは異なる動きの制御をする。本研究で早産児の母子間のコミュニケーション場面と非コミュニケーション場面での自発運動を比較したところ、母子コミュニケーション場面では、自発運動がとまりがちになり、四肢の協調性が強い動きが比較的少なくなる事例が多かった。環境から与えられる刺激に応じて変化する早産児の発達については、論文を2本、著書1本を執筆した。</p> <p>(3)青年期の進路選択と友人とのコミュニケーションについての検討 青年期（中学・高校・大学）の友人とのコミュニケーションと進路選択の関連について、関連研究者・中・高の教員と意見・情報交換を重ねた。また、青年期の進路選択能力の評価方法について文献を読み、それに基づいて大学での縦断的な面接調査および中学校での質問紙調査を実施した。成果としては、青年期の進路選択に関する論文を2本執筆、1本は印刷中である。</p> <p>(4)コミュニケーションと人間関係 コミュニケーションと人間関係について、データの収集と学会での発表を行った。特に、等質性・異質性とコミュニケーションや集団によるパフォーマンスの関係について中心に検討され、異質性の高い条件では潜在的に優れた生産性を上げる可能性が高くなるが、異質性の高さは一方で相互の共通理解やコミュニケーションを妨げる可能性があり、等質性と異質性をともに実現することの重要性が指摘された。</p>